


(専門科目)

科目名	特別講究 (西洋教育史) 英語名 : Special Seminar on History of Western Education	必修/選択	選択必修	
		単位数	2 単位	
		担当教員	平岡 麻里	
<b>【授業概要】</b> R. オルドリッチが現代の教育の諸問題をイングランドの過去の教育史上の事実に基づいて分析した『イギリスの教育』、および同じ分析枠組みでそれぞれの領域の専門家が執筆を担当した『教育の世紀』を読み、イギリス教育の歴史的概観と主要な論点を理解する。同時に、現代の教育問題を歴史的時間のなかに位置づけ、教育についての議論に広く一般の参加を求めることを目的とした教育史の方法論の1つを学び、この方法の問題点も含めて議論する。また、原著の出版から4半世紀以上たち、サッチャー改革からブレア政権の教育改革を経て、当時の教育問題のその後の展開も含めて検討し、現代における教育の現実や日本とのかかわりという視点でのイギリス教育史の分析を試みる。				
<b>【キーワード】</b> イギリス、教育、近現代、変化と連続性、歴史との対話、日英教育交流				
<b>【授業の到達目標】</b> 1. イギリス教育の歴史的概観を把握し、主なテーマにおける学問的上の論点を理解する。 2. 我々自身を現在、過去、未来という歴史的時間のなかに位置づけ、未来への展望する教育史の方法論の1つを学び、その枠組みを使って分析できる。 3. 日英教育交流という視点を例に、他国の教育の歴史を当事者としてとらえ直すことができる。				
<b>【教育の方法】</b> スクーリングの実施【あり】 スクーリングのメディア受講【可】				
<b>【授業計画】</b>				
回	内 容			
1	オリエンテーション			
2	変化と連続性：初等教育			
3	変化と連続性：中等教育			
4	変化と連続性：高等教育			
5	変化と連続性：生徒と学生			
6	歴史との対話：教育へのアクセス			
7	歴史との対話：カリキュラム			
8	歴史との対話：水準と評価			
9	歴史との対話：教育の質			
10	歴史との対話：教育統制			
11	歴史との対話：教育と経済			
12	歴史との対話：教育の消費者			
13	日英教育交流：お雇い外国人・英国教育イメージと英国教育モデル			
14	日英教育交流：ジャポニズム・日本教育イメージと日本教育モデル			

15	まとめ
試験	
<p><b>【履修にあたっての準備・履修上の注意点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初回スクーリング受講後は、指定したテキストを読み、教員が提示した課題を行っていく。</li> <li>・教科書は邦訳があるものを中心だが、原書での理解が必要なこともある。また、課題にあたっては、教科書や参考図書以外の文献を自身の研究課題に応じて参照することが必要となる。</li> <li>・受講生の興味関心に応じて『教育の世紀』の原著にはあるが日本語版では割愛されている「継続教育」、「中央政府と地方政府」、「特別な教育ニーズ」（英語文献のみ）を扱うことも可能である。</li> </ul>	
<p><b>【スクーリングでの学修内容】</b></p> <p>本科目では、教科書の学修を通じてイギリス教育の歴史的概観を把握し、主なテーマにおける学問上の主な論点を整理するとともに、現代の教育問題を歴史的時間のなかに位置づける教育史の1つの分析枠組みを学び、その枠組みをつかって自身の研究課題を分析する。</p> <p>学修初期のスクーリングでは、学修したイギリス教育史の論点のうち自身の研究課題と最も関係があるものについて発表し、この方法の問題点も含めて分析内容を議論する。スクーリング後は、教科書以外の参考文献も使用した上で自身の解釈も含めて検討し、それらの成果をレポートにまとめる。</p> <p>学修後期のスクーリングでは、科目修得試験に向けて、この枠組みを使って自身の問題関心を分析するための準備を行う。そのため、スクーリング前に自身の研究課題と関連のある文献および史料を収集し整理する。スクーリングでは収集した情報およびその（仮の）分析内容を報告し、議論する。スクーリング後は、この科目での学修全体の成果を踏まえて、自身の選択したテーマについてこの分析枠組みにそった形式でまとめたものを科目修得試験として作成する。</p> <p>スクーリングはこの2つの時期を含み、合計4コマ6時間以上をめぐり行う。</p>	
<p><b>【評価方法】</b></p> <p>可否については、学修したイギリス教育史の論点のうち自身の研究課題と最も関係があるものについて発表（25%）、レポート1本（25%）、科目修得試験（50%）で評価する。</p>	
<p><b>【教科書】</b></p> <p>オルドリッチ, R. (2001) 『イギリスの教育：歴史との対話』 玉川大学出版部, 東京.</p> <p>オルドリッチ, R. (編) (2011) 『教育の世紀』 学文社, 東京.</p> <p>Hiraoka, M. (2010) 'The Images of the Japanese Education System as a Possible Model for Reforming British Education, 1868-1914', <i>The History of Education Researcher</i>, 85, 1-10.</p> <p>Hiraoka, M. (2021) 'Transnational information flow and domestic concerns: Japanese educational exhibits in the late nineteenth and early twentieth centuries in Britain' in <i>Transnational Perspectives on Curriculum History</i>, Routledge, London, 108-130.</p> <p>※学修箇所は初回スクーリングで指定する。また、各学生の状況や研究テーマに応じて教科書を変更・追加することがあるので、購入前に教員に確認すること。</p>	
<p><b>【参考図書】</b></p> <p>Aldrich, R. (1996) <i>Education for the Nation</i>, Cassell, London.</p> <p>Aldrich, R. ed. (2002) <i>A Century of Education</i>, Routledge, London.</p> <p>バークス, A. (1990) 『近代化の推進者たち：留学生・お雇い外国人と明治』 思文閣出版, 京都.</p> <p>Checkland, O. (2003) <i>Japan and Britain after 1859: Creating Cultural Bridges</i>, Routledge, London.</p> <p>英国教育調査団・中西輝政（監修）（2005）『サッチャー改革に学ぶ教育正常化への道：英国教育調査報告』 PHP 研究所, 東京.</p> <p>石附実 (1992) 『世界と出会う日本の教育』 教育開発研究所, 東京.</p> <p>小林章夫 (2005) 『教育とは：イギリスの学校からまなぶ』 NTT 出版, 東京.</p> <p>三好信浩 (1986) 『日本教育の開国：外国人教師と近代日本』 福村出版, 東京.</p> <p>森嶋通夫 (1977) 『イギリスと日本：その教育と経済』 岩波書店, 東京.</p> <p>サイモン, B.・堀尾輝久 (1987) 『現代の教育改革：イギリスと日本』 エイデル研究所, 東京.</p> <p>佐貫浩 (2002) 『イギリスの教育改革と日本』 高文研, 東京.</p> <p>梅溪昇 (2010) 『お雇い外国人の研究』 青史出版, 東京.</p> <p>山内久明・柏倉康夫 (2004) 『表象としての日本：西洋人が見た日本文化』 放送大学, 東京.</p>	

**【教員メッセージ】**

- ・教育史は過去と現在の教育活動をつなぎ、今の我々（過去の教育の **product**）がなぜこのようにあるのか理解することができるだけでなく、その理解によって未来も変える可能性（希望？）がある学問領域であるということを、R. オルドリッチの分析枠組みでみるイギリス教育史から感じていただければと思っています。

**【備考】**

特記事項なし